より充実した クトゥルー神話の事典本 として必携の一冊！

第1章 012

ドゥルーム＝アヴィスタ

Droom-Avista

ベル・ヤーナク
ヴォルヴァドス
“彼方の住人”
“暗く輝く者”

眠りに沈む神

オリオン座の1等星ベテルギウスのさらに彼方、3つの月のある謎めいた星に、黄金と白銀で装飾された壮麗な都、ベル・ヤーナクがある。この地では主にヴォルヴァドスが崇拝されているのだが、強力な魔術師でもある神官たちの間では、“彼方の住人”あるいは“暗く輝く者”などと呼ばれるドゥルーム＝アヴィスタなる神もまた知られていた。

ドゥルーム＝アヴィスタは、7つの月を従え、この神を深き眠りから目覚めさせる名前を口にすることで冒涜される。ひろん、眠れる神を深淵より地づけはすることは禁忌以外の何物でもなく、現在ドゥルーム＝アヴィスタは、ただ眠りは続けられた。」と不満の声を漏らし、その眠を目ぶけるための鎖れとして、白物者の眠いを立つ立つだけのなえる。

ベル・ヤーナクの大神官トラゾールは、月物を赤々な赤へと変化させる黄金の玉を求め、ドゥルーム＝アヴィスタはその願いをかなえると、内ぶ夢の中に落ちていく。

百年近く賢者の石を手に入れたトラゾールは、喜び勇んで化学実験に百手するのだが、変化は黄金のるつぼの外側へと広がり、魔術師自身の肉体のみならず、ベル・ヤーナクの都市全体を赤金属に変えてしまう。

もはや、ベル・ヤーナクは失われた。そこはう、“鉄の都市”ディスと呼ばれている。

神の報復

この物語は、ヴォルヴァドスの登場するヘンリー・カットナーの「魂を喰らうもの The Eater of Souls」（森葉未訳）の続編的な作品。「ドゥルーム＝アヴィスタの蠢れ The Jest of Droom-avista」（同）が収録です。“ミダス王の黄金の手”を想起させられる流用の強いた短編で、眠りを妨げられることを嫌う神の報復譚となっています。

これもベル・ヤーナク126ものに続き、カットナーの「侵略者」（既訳は「侵入者」）によって、ヴォルヴァドスがクトゥルー神話に取り込まれたので、ドゥルーム＝アヴィスタもこの神話の万神殿に名を連ねました。作中では明言されませんが、あるいはこの神もヴォルヴァドス同様、ムー大陸117で知られていたのかもしれません。

— 29 —

第3章 035

人類種

Humanity

蛇人間
“古ふるしきものども”
“深きものども”
ヒュペルボレイア

現生人類以前の“人類”

HPLに代表されるクトゥルー神話物語には、しばしば「人類の誕生以前」という言い回しが出てきます。これは、ベルム紀から三畳紀にかけて存在した超大陸パンゲアで発生した蛇人間や、南極を中心に都市国家群を建設した“先住者”（Elder Race）[L041]など、人類以前にも数多くの種族がこの地球上に文明社会を築いたという神話年代記を象徴する言葉です。

では、この“人類”というのは具体的にいかなる種を指していて、それが“誕生”したのはいつなのかというと、それについては曖昧にされてきました。

現生人類であるホモ・サピエンス・サピエンスは、DNA分析によって現在の主流となっているアフリカ単一起源説によれば、およそ20万年前にアフリカ南部のボツワナ北部、かつては巨大な湖が存在したというザンベジ川流の地域に発生したと考えられています。

哺乳類霊長目ヒト科のホモ属（ヒト属）それ自体の発生は、ケニアのトゥルカナ湖東岸で化石の発見された190万年前のホモ・ルドルフェンシスに遡りますが、言語を用いるようになったのは25万年ほど前の旧人類（ホモ・ネアンデルターレンシス、ホモ・ローデジエンシスなどを含むホモ・サピエンス以前の人類種）が最初だと考えられています。

しかしながら、クトゥルー神話物語には、明らかに20万年よりも遥かに古い時代に、それなりの規模の文明を築き、言語や文字を用いていたと思しい“人類種”がしばしば登場します。たとえば、HPL「狂気の山脈にて」によれば、南太平洋に浮上した大陸（おそらくレムリア大陸111）にクトゥルーとその眷属が到来してルルイエ107などの都市を建造し、その陸地が再び水没したのは石炭紀（3億5920万頃～2億9960万年前）の出来事であると示唆されています。興味した時点では「人類が誕生する以前」だとされますが、HPLの書簡などにおいて、この大陸でクトゥルーを崇拝していたのは人類種か、さらなる人類種に非常によく似た知的種族であるように読み取れます。

もちろん、前述のようにホモ・サピエンス・サピエンス以前にもヒト科の霊長類は存在していたわけですが、石炭紀ともなりますと、哺乳類の先祖である単弓類（昔は哺乳類型爬虫類と呼ばれました）がようやく発生した時代で、霊長類すら存在しません。

— 56 —

では、南太平洋の大陸においてクトゥルーを崇拝したという人間の種族が何物だったのかというと、その回答の一端はHPLがズィーリア・ビショップのために代作した「墓穴」に示されています。同作によれば、ウィチア族などの先住民族の間で“古ふるしきものども”と呼ばれている、地下世界クナ＝ヤン[L024]の大都市ツァスで暮らす住民たちは、彼らが“大いなるトゥル”の名前で崇拝しているクトゥルーが地球にやってきた時、一緒に宇宙から連れてこられた種族だとされているのです。

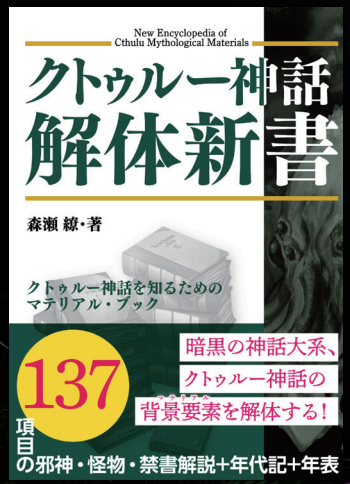
彼らは外見上は人間と特に変わらないようです。16世紀にとあるスペイン人が遭遇した“古ふるしきものども”は北米先住民族と似た印象を与えながらも、様々な点で異なる部ともで、古い時代にはアステカ語の語彙が取り込まれた言語を話していたようですが、もっぱら思考の疎材で会話をします。彼らは遠い昔、「人間と同様、人間の神々にも敵意を抱く宇宙の悪魔の領域」によってレレクス（ゾルルイェ）を含む大陸が海に沈んだ時、現在の北米大陸の植民地である地下都市にいて難を免れた生き残りで、寿命を克服して数百年から数千年生き長らえているようですが、「過去数千年の間に、老齢と死の現象を克服」とありますので、水没前の時代には現生人類と変わらなかったかもしれません。

なお、「インスマスを覆う影」に登場する“深きものども”について、HPLの覚書（1924年のメモ）に「人間の先祖である爬虫類種族（科学的方法によって先祖帰りする）」とありますので、“古ふるしきものども”と“深きものども”は、HPLの構想上では共に現生人類の先祖なのかもしれません。

ヒュペルボレイアの人類

CASの作品世界であるヒュペルボレイア大陸113は、「ウボ＝サスラ」では中新世（約2300万年～約500万年前）に位置づけられていて、これは明らかにホモ・サピエンスの出現以前の時代です。ただし、「土星への扉」（既訳邦題「魔道士エイボン」）では「大水河期が始まる前の最後の数世紀」とあり、この“大水河期”をいつのものと解釈するかによって事情が異なってきます。たとえば、現在も含まれる第四紀氷河時代の最終氷期は約7万年前に始まり、1万年前に終わりました。北半球の中・高緯度地域にマンモスが棲息していたのがこの時代で、ヒュペルボレイアにおいてマンモスの象牙製のサイコロが使用されていたことに鑑みると（「アダマウスの遺言」）、ヒュペルボレイアものの物語は7万年前なのかもしれません。ちなみに、HPLは「時間を超えてきた影」において、ヒュペルボレイアでツァトゥーグァを崇拝していたという、人類誕生以前の巨虫に覆われた種族（おそらくヴーアミ族[L029]）に言及しています。

— 57 —



New Encyclopedia of Cthulu Mythological Materials

クトゥルー神話解体新書

森瀬 繚・著

クトゥルー神話を知るためのマテリアル・ブック

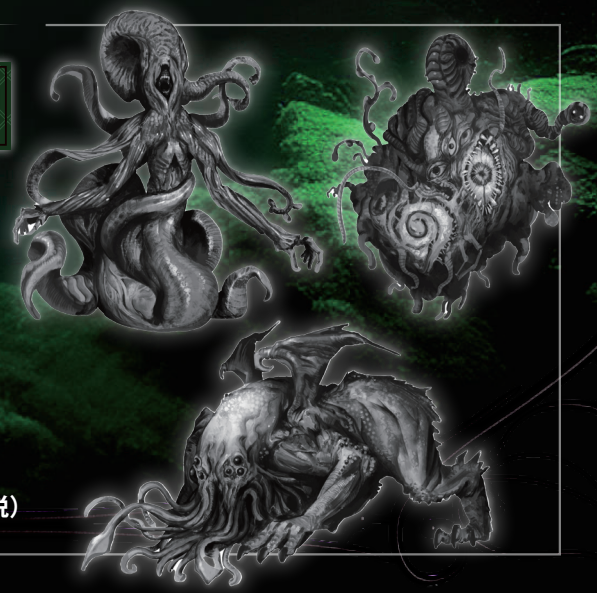
137項目の邪神・怪物・禁書解説+年代記+年表

暗黒の神話大系、クトゥルー神話の背景要素を解体する！

前作『クトゥルー神話解体新書』

ファンタジー作品の世界観 深く知りたい人必携の一冊！

クトゥルー神話の第一人者 森瀬 繚による

2020年代最新解説の書！！

好評発売中！ 定価2500円（本体2,273円＋税）